

308. 草津市柳遺跡（5次）の 発掘調査

1. はじめに

柳遺跡は草津市のほぼ中央を流れる草津川の左岸、草津市青地町に所在する。これまでの発掘調査の成果から弥生時代～鎌倉時代の集落跡として周知されている。今回の発掘調査は草津川放水路建設に伴い、実施されたものである。草津川は江戸時代頃からすでに天井川として知られており、周辺の集落の人々はたびたび川の氾濫に悩まされてきた。そのため天井川と化した草津川を、平地を流れる川にするために草津川放水路建設が計画された。草津川放水路建設に係わる発掘調査はおよそ20年前の昭和57年度に始まり、平成13年度の発掘調査をもって現地発掘調査は終了し、平成14年9月には通水式が行われた。

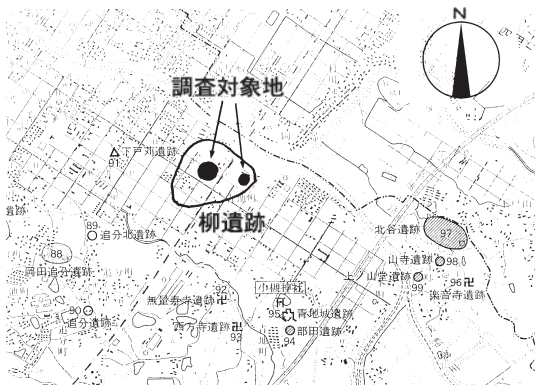


図1 柳遺跡位置図

2. 調査の概要

今回の発掘調査では主に弥生時代後期と鎌倉時代～室町時代にかけての遺構を検出した。弥生時代後期の遺構としては、自然流路、排水溝を伴う土坑、ピット、溝等が検出されている。また鎌倉時代～室町時代にかけての遺構は複数面にわたる水田跡が検出された。以下、それぞれの時代ごとに検出された遺構の概要をまとめる。

【弥生時代後期の遺構】

・自然流路

最大幅10m以上、深1.8m以上を測る。多くの弥

生時代後期に属する土器とともに、木製品が大量に出土している。同時期に存在したと考えられる流れを4条確認している。それぞれ、T10、11ではSX1-Ⅱ、SX1-Ⅳ、T12ではSD1、T13ではSX2である。これらが全て1本の流れとしてつながるのかは現時点では不明である。しかし、出土する土器に時期差があまり無いことや埋土の堆積状況が似た様相を呈していることから併存したことは確実であると考えられる。

出土した遺物のなかで木製品は状態も良く、充実している。注目されるものとしては、内面に赤色顔料の付着した大型の鉢、朱塗りの盾、直径が1m近くある大型の臼、鍬や鋤などの農具、建築部材などが出土している。また、木製品を作るための原材や鍬や鋤の未製品も多く出土し、周辺で木製品製作の一連の作業をしていたことがわかり、その製作過程を知る上でも重要な発見となった。

・堰状遺構と分水溝

T10の自然流路（SX1-Ⅱ）では堰が設置されていた。この堰は作り直しされている状況が確認できる。一部現代の攪乱を受けているが、全長は7m以上でほぼ川幅いっぱいには設置されていたと推定される。

第一段階の堰はまず、大きな自然木を横木とし、薄く「みかん割り」した板材の先端を削り、杭として打ち込み横木を支えている。打ち込まれた杭の傾きから（SX1-Ⅱ）水の流れは南から北に向かっていたと考えられる。この第一段階の堰から派生する分水溝としてSD4がある。SD4は幅0.6m、深さ0.4mを測る。両側を板杭で護岸され、



写真1 堰と分水溝（南から）

断面はV字型を呈する。

第二段階の堰は第一段階の堰の前面（上流側）に設置される。水流などで壊された前段階の堰を補修したと考えられる。壊れた堰の前面に新たな横木を置き、同様に杭を打ち込み固定している。この段階の堰から派生する分水溝としてSX1-Ⅲがある。この溝は幅2.5m～1.5m、深さ0.6m、全長は40m以上を測り、南から北に向かって緩やかに傾斜する。分水口の護岸には丸杭を使用している。このSX1-ⅢはSD4のやや南で検出され、SD4を切っているため、堰本体を2時期に分ける根拠となっている。なお、SD4、SX1-Ⅲともに流れの方向は同一であり、切り合い関係はあるもののその下流部分は共有していると考えられる。この分水溝は後述する水溜状遺構に流れ込み、さらに下流へと延びていくと考えられ、その先には水田の存在を想定している。

・水溜状遺構

T10の北隅において検出された。幅4.2m以上、深さ0.4～0.5mを測る。攪乱を大きく受けているため詳細なプランは不明。調査時にはSX2-Ⅱと呼称した。上層からは重複する遺構としてSX2



写真2 水溜状遺構（北から）

-Ⅰを検出しているが、SX2-Ⅱとの関連性は無いと判断される。

水溜状遺構SX2-Ⅱと分水溝SX1-Ⅲには切り合い関係が確認できなかったため、先述したように両者は合流していると判断した。その合流地点ではそれぞれの遺構の肩を護岸する矢板杭を検出している。その配列から平面プランの一部を復原できた。矢板杭は合流地点のそれぞれのコーナーをL字型に護岸し、全体として十字状に遺構が合流する様子が復原できる。

矢板杭は特にコーナー付近で密に打ち込まれており、頑丈に補強されている状況が窺える。SX1-Ⅲでは矢板杭のほかに溝の底に水流と直行する位置に横木が置かれている。横木は合流地点より上流側で5本、下流側で5本をそれぞれ確認している。ここで矢板杭と横木についてももう少し詳しく触れておく。まず、矢板杭は堰状遺構で使われていた杭と同様の材で、薄く「みかん割り」した材の先端を削って作られている。杭の幅は5～10cmで長さは60～120cmを測る。そのほか数は少ないが丸杭も若干含まれる。丸杭の直径は3～5cmで長さはまちまちであるが概して「みかん割り」した材よりもかなり短い傾向にある。杭の大部分は垂直に打ち込まれているが、例外的に角度をつけ斜めに打ち込まれているものもあり、その目的は横木の固定、あるいは護岸の杭をさらに補強するものであると考えられる。杭はそのほとんどが全長の5割以上が打ち込まれ、深いものでは1m近く打ち込まれているものもある。平均すると50cm以上打ち込まれ、頑丈に護岸された感を受ける。これはベースとなる層が砂地であることによると思われる。

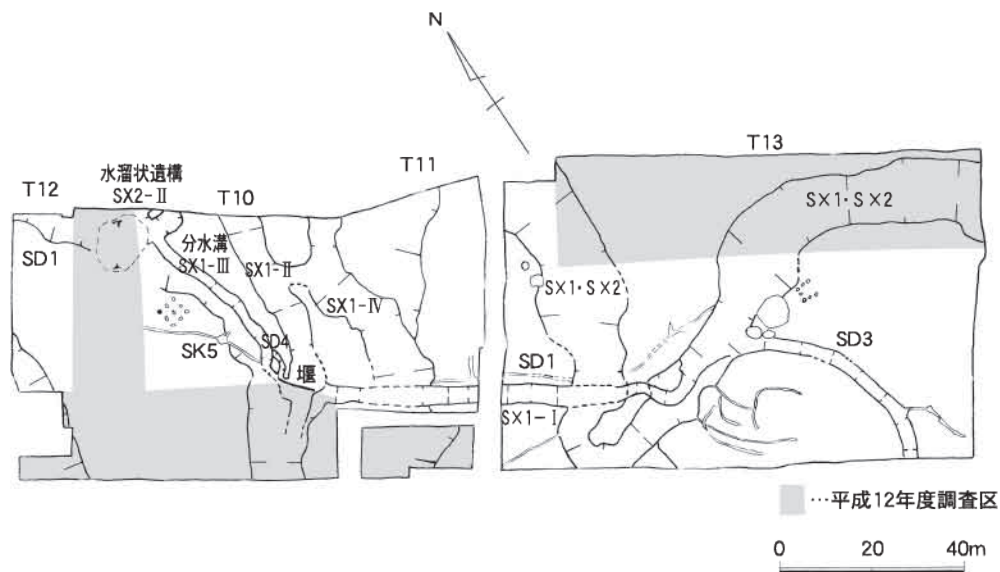


図2 T10～T13遺構図

次に横木は、直径10～15cmの丸太材を長さ60cm程度にカットし、SX1-Ⅲの底部に置かれた状態で検出された。横木は杭と杭の間にあり、まず横木を設置してから杭を打ち、固定したと判断できる。横木の上面のレベルはそれぞれほぼ揃えられているが、合流地点より下流側の横木のレベルは上流側のレベルに比べると、10～20cmほど高くなっている。これはSX1-Ⅲの底のレベルが合流地点より下流側で一度少し高くなることに対応する。これらのことから、横木が置かれる目的は堰で分水された流れの水位を調整し、一度水溜めに落とした上でさらに下流側の溝の底あるいは横木を高くすることで流木などの不要物を沈殿させた水をさらに下流へと供給することであったと考えられる。

・排水溝を伴う土坑

T10の自然流路より西側で検出された、直径約2m、深さ約1.2mを測る円形土坑で調査時にはSK5と称した。排水溝と考えられる溝は3条検出し、東側に2条と西側1条が延びる。幅は0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。この土坑と溝の埋土を分析したところ、常時滞水していたわけではないことがわかっている。祭祀用土坑か。

・その他の遺構

その他の遺構としてはT10-SX1-ⅡとT13-SX2にそれぞれ重複する自然流路を検出している。調査時にはそれぞれ、T10-SX1-I、T13-SX1と称した。ともに幅約6m、深さ約0.5mを測る。時期は現地調査時の所見では弥生時代終末頃と考えられた。なお、SX1-IのT13-SX1から分かれる部分からT11南端部を流れる部分に関しては人工掘削の流路である可能性が確認できるので、T10-SX1-ⅡとT13-SX2にそれぞれ重複する二つの自然流路を結ぶバイパスとしての機能を考えている。このバイパス部分は幅4m、深さ0.3～0.6mを測る。あわせてT11、13においてこれに並行する溝(SD1)を検出している。幅0.4m、深さ0.2m前後を測るが、この溝の性格については不明である。また、T13において弯曲する溝SD3を検出する。幅3.0m、深さ0.5mを測る。SX1に合流すると考えられるが、他の遺構との関連性は現在のところ不明である。時期は弥生時代終末頃～古墳時代初頭を考えている。

【鎌倉時代～室町時代の遺構】

T14・15において水田遺構を検出した。この水田遺構は5回にわたる作り直しを確認している。最初に開かれた水田は13世紀中頃と考えられ、その後洪水による被害を受けるたびに水田を復旧してい

る。大規模な洪水の後には広範囲にわたって復旧作業をしていることからかなりの組織力を持って水田を管理していたと考えられる。また水田の耕土に含まれる花粉の分析結果から稲のほかソバやゴマも栽培されていたことがわかっている。調査時にはそれぞれの水田面を古い段階から、「水田1B-II」、「水田1B-I古」、「水田1B-I新」、「水田1A」、「水田1C」と呼称した。

・水田1B-II

この水田面は今回検出された水田の中で最初に開かれた水田で、耕土はおおむね黒灰色土で構成される。耕土中より出土した遺物、および水田下層遺構の年代観から13世紀中頃に開かれたと考えられる。

畦畔は検出された畦畔と想定される畦畔をあわせて22条で、田面の数は20筆を数える。田面は地形に合わせて南から北に向かって徐々に段差がつき、低くなっていく。田面が最も小区画される段階である。

・水田1B-I古

水田1B-IIの一部が洪水被害にあったのち部分的に復旧された段階の水田。復旧が一部分であるため畦畔や田面の数は変化しない。ただし洪水によって堆積した川砂が及ぶ範囲は畦畔を同じ場所に積み直し、川砂の上に新たな耕土を作る。この結果、復旧された部分は水田1B-IIの上面より15～20cm高くなる。新たな耕土は暗青灰色粘質土で構成される。

・水田1B-I新

水田1B-I古が洪水被害を受け、ふたたび復旧された水田。川砂の及ぶ範囲は前回とほぼ同規模で小規模の復旧であるが、この段階で復旧された範囲のうち畦畔が2条消滅し、1条は

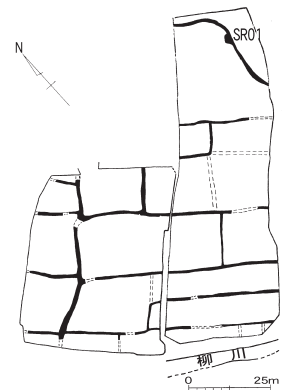


図3 水田1B-II

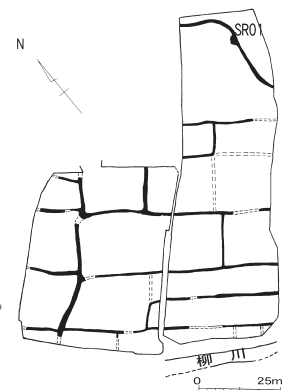


図4 水田1B-I古

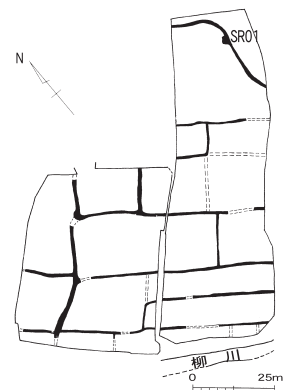


図5 水田1B-I新

積み直しが確認できる。そのため全体の畦畔は20条、田面は18筆を数える。新たな耕土は灰色砂混じり粘質土で構成される。この水田の上面では一部であるが、足跡と考えられるくぼみを検出する。このくぼみは畦畔に並行するように7～8条検出され、不定形ではあるが人の足跡と判断できるものもある。

・水田1A

水田1B-I新が洪水による被害を受け、みたび復旧された水田。調査区全域にわたって復旧されていることが特徴的である。畦畔は前段階からさらに6条が消滅し、14条となり、田面の数は12筆を数える。畦畔の数が減った分、田面1筆は拡張され、最大で46cm耕土を入れ、水田面の高さを揃えている。耕土は暗灰色粘質土で構成され、遺物を包含する。時期は14世紀末～15世紀後半頃と考えられる。この水田の上面においても足跡や鍬や鋤の跡、畦畔に並行するうね溝等を検出する。

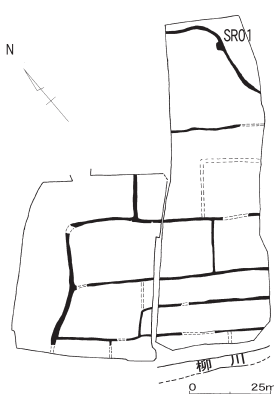


図6 水田1A

・水田1C

水田1Aの上面に洪水による川砂が大量に堆積し、さらにその上面に作られた田面。トレンチ断面のみによる確認で、平面調査は行っていない。畦畔の数はさらに減少し13条となり、田面の数は11筆を想定している。耕土は青灰色砂混じり粘土で構成される。時期は15世紀後半以降か。

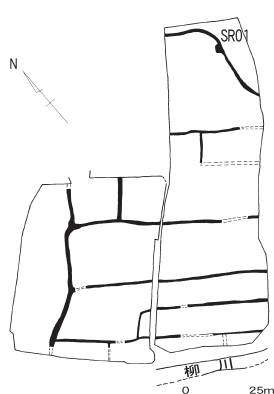


図7 水田1C

さらに上面では近世から近現代と考えられる土採り遺構を検出する。この遺構では一部今回検出した水田

の畦畔と重複する畦畔が検出され、水田の耕土を採っていたことがわかり近世以降もこの地には水田が営まれていたことが確認できた。

・SR01

T14の北端で検出され、水田とは畦畔で画される。水田1B-II～水田1Cまで存在したと考えられる。断面の状況から流路あるいは水田の一部を想定していたが、埋土の花粉分析の結果、ジュンサイ属の植物が生育していたことが確認され、水流がほとんど無いか、あるいは非常に緩やかな流れの湿地に近い環境であったと考えられ、池もしくは沼地の可能性を指摘しておく。人為的な遺構かは不明。

3. ま と め

以上、今回の調査で検出された遺構を弥生時代後半と鎌倉時代～室町時代を中心にとまとめたが、特に注目できる成果として、多量の木製品が良い保存状態で出土していること、鍬や鋤などの農具が未製品も含め出土していることで木製農具の製作過程を知る手がかりとなること、堰・分水溝・水溜り遺構がセットで検出され、弥生時代の水利の状況の一端が垣間見られたこと、また水田遺構では何度も洪水被害にあいながらもそのたびに復旧作業が行われていた状況が確認できたことなどが挙げられる。さらに今回検出された水田は隣接する平成12年度の調査区で検出された水田遺構の続きで、ともに栗太郡統一一条里地割にのるもので、13世紀中頃にはこの地にも統一一条里が施行されていたことが確認されたことも大きな成果である。

今後整理調査が進む上で新たな事実や本稿との矛盾点・相違点などが多く見つかり、さらに議論が積み上げられていくことを期待したい。

最後に今回の調査は自然流路や水田遺構の検出、さらに調査区が大雨や排水設備の故障などにより幾度となく水没するなど「水」に縁が深い調査であったことを記しておく。

(財滋賀県文化財保護協会 坂口健太)



写真3 水田遺構（西から）